



〈いのちへの感度〉と自己責任：「子産み」の視点から (コメント 2014年度コロキウムより)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 美智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14912

〈いのちへの感度〉と自己責任：「子産み」の視点から

浅井 美智子

はじめに

本日、福永さんは〈いのち〉への感度という観点から福島第一原発事故後の放射能汚染問題が提起する「息苦しさ」「生きにくさ」、つまり〈いのち〉への感度に関する選択を「自己責任の下で」なさねばならないことへのひとつの問題提起をされました。内部・外部被ばくへの恐れは、現に生きている人々を分断させるだけでなく、これから子産みをしようとする多くの女性たちに「自己規制」を強いています。ここでは、私の問題関心から「子産み」と放射能をめぐる見えない統制と自己規制、科学的とされる調査結果によって隠されることについて、チェルノブイリ原発事故（1986年）との比較から述べさせていただきたいと思います。

1. チェルノブイリ原発事故が明らかにしたこと（隠蔽されてきたこと）

ドイツ放射線防護協会（核戦争防止国際医師会議ドイツ支部）がまとめた『チェルノブイリの健康被害——原子炉大惨事から25年の記録』（原発の危険から子どもを守る北陸医師の会誌、2012）によれば、チェルノブイリ周辺地域では事故の翌年（1987年）、死産や周産期死亡が増加し、1989年に周産期死亡が増加しています。前者はセシウム被ばく、後者はストロンチウム被ばくと関連性があると言われていたそうです。また、1986年、ドイツのベルリンでも1985年と比べて、乳幼児死亡率が26%（生後1週間の死亡を除く）増加したといいます。その他のヨーロッパ地域でも今もってチェルノブイリ事故が拡散した放射能による被害は続いていると言われ

ています。しかし、とりわけ見過ごされてきたのは、流産と人工妊娠中絶であろうと指摘されています。たとえば、ギリシャでは、1986年5月、妊娠早期に23%が中絶したと推測されています。

「チェルノブイリ地域では医師や女性たちによって多くの妊娠が墮胎の適応と判断され、事故に引き続いて数日から数週間は組織的に実施された。誰もこのことについて語りたがらず、私たちはこれらの墮胎について正確なデータを知ることはできない。…（一般的な価値判断では胎児の早期妊娠中絶は個人的にも社会的にもほとんど重要性をもたないという意見もあるが）胎児がぞっとするほど中絶されたこと、これも一つのチェルノブイリの犠牲とみなされる」。(同上書：第3章)

2. 福島原発事故後～

福島原発後の中絶や流産に関して、福島県立医科大学の調査は若干の中絶の増加は見られるものの例年と変わらないと報告しています。しかし、チェルノブイリ原発事故後の状況から県立医大調査の結果を鵜呑みにすることはできないということでしょう。中絶は自由診療ですから、調査統計にはのらないものが多数あります。また、他府県に避難し、中絶、流産となるケースもあるでしょう。先のドイツの報告書によれば、旧東ドイツではチェルノブイリ事故後の出産児に、放射線被ばくに典型的な先天性奇形や21トリソミー（ダウン症）の増加がみられるとのこと。さらに福島では、2014年8月時点で、57名の子どもが甲状腺ガンと確定され、46名がガンの疑いがあり、58名もがガンの摘出手術を受けていると報告されています。

3. 〈いのち〉への感度に関する選択を「自己責任の下で」の意味すること

普通の人々が測りようのない放射線被害に恐怖している現在、福永さんから、生きることを選択を「自己責任の下で」行うことの問題が指摘されま

した。〈いのちへの感度〉を下げる選択を〈生〉のためにすること、感度に敏感であろうとすることが、ともに、他者への抑圧やネガティブな評価をうけることになってしまう現実があるということです。また、「エコフェミ論争」とは何だったのかという、福永さんの問いは、エコフェミを「母親の運動」として支えた人々、またエコフェミを批判したフェミニストの、〈いのち〉への感度について省察されなければならないという問題提起です。

〈いのち〉の伝達は、産む性である女性（母親）だけの問題ではないでしょう。むしろ、〈いのち〉あるものすべてと私たちがつながっているという視点から、近代的孩子も観（わたしの子どもという所有）を相対化する必要があるのではないかと思います。チェルノブイリ事故後30年経た今日、放射線被害はまだまだ収束していません。放射線は人間の遺伝子に損傷をもたらすばかりではありません。自然界に生きるものすべてに大きな影響を与えます。福島原発事故を個人や母親の責任にしたり、社会的にネガティブな評価を下したり、そして何より、「見なかったことにする」という事態を打破せねばならないことを痛感しました。

いちばんの危険は「知っていることを知らない」こと、つまり自分が否定している思い込みとか、自分が信じていることに気づいてもいない仮定である。（スラヴォイ・ジジエク『事件！』より）